緑地帯　藤森　晶子

「声」を求めて ①

15年ほど前の大学時代に研究し始めた題材を、昨年、「丸刈りにされた女たち」（岩波書店）という本にまとめることができた。その題材とは、1944年のフランスで起きた女性への暴力である。

第2次世界大戦初期、ナチス・ドイツに敗退したフランスには、占領軍が駐留していた。ドイツ兵と現地の人々との接触は必然で、商売などの職業上、兵士の近くにいた女性や、私的に恋愛関係にあった女性がいた。さまざまな関わりがあったにもかかわらず、女性たちはひとくくりに「ドイツ兵と性的関係を持った」とレッテルを貼られ、ナチスからの解放時に、同胞から髪を刈られた。

彼女たちを捉えた映像を初めて見たのは高校3年の時。広島市内の実家で見ていたドキュメンタリー番組だった。「ドイツ兵と交際があった女性へのリンチ」として、頭皮がむき出しの女性たちが映し出された。おしゃれなイメージで憧れだったフランスで、こんなひどい暴力が起きていた。いくら敵と恋愛したからといって、こんな暴力が許されていいのだろうか。思わず目をそらした。

彼女たちは私の祖母と同世代である。広島で被爆した祖母にその後の人生が続いているように、この女性たちにも人生があるはずだ。どうやって生きていったのか、本人たちから話を聞かせてもらいたい。大学院に進んだ私は、2004年、ドイツ国境に近いフランス東部の町ストラスブールへ留学することになった。

（ふじもり・あきこ　在日外国公館勤務＝東京都）

緑地帯　藤森　晶子

「声」を求めて ②

被爆地の広島生まれだからこそ、戦争による傷痕に関心を抱き、被爆者である祖母と同年代だからこそ、フランス解放時に同胞から髪を刈られた被害女性たちに親近感を覚えるのだ―。

「丸刈りにされた女たち」の声を聞くためにフランスに留学中、彼女たちを学術研究の「対象」とすることに対し、そんなふうに自分を正当化せずにはやっていられなかった。同時に、そんなのはこじつけにすぎないとも感じ、葛藤した。

しかし、フランスで会ったセシルさんは、私が「こじつけではないか」とひた隠しにしていた思いを、逆の立場から肯定してくれたように思えた。

セシルさんは若い時、フランスに駐留していたドイツ兵と婚約。だが、戦時下の擦れ違いから結婚には至らなかった。「丸刈り」の危機にもさらされたが、家族が機転を利かせて免れたという。その後はフランス人との結婚と離婚を2度ずつ経験。家族がいない境遇を不運であると嘆いていた。

セシルさんは、映画「ヒロシマ・モナムール」（邦題「二十四時間の情事」）の主人公と自分を重ね合わせ、自分こそがモデルだと言いたげですらあった。毎年8月6日には必ず広島を思い、祈りをささげると話していた。広島の被爆者である私の祖母たちを、親戚のごとく気に掛けてくれた。

異国の出来事に、こんな温かな共感を持つことができるものなのか。私は研究という体裁などどうでもよくなり、人生の先輩に話を聞かせてもらうのだという態度に自然と変わっていった。

（在日外国公館勤務＝東京都）

緑地帯　藤森　晶子

「声」を求めて ③

「丸刈りにされた女たち」に関する調査を終え、留学先のフランスから帰国して何年かたったある日のことである。

久々にログインした会員制交流サイト（SNS）に、知らないフランス人男性からのメッセージがたまっていた。読むと、「おばあさんに会いにきた人物か」と尋ねている。現地で会った「女たち」の一人、セシルさんの孫からのメールであった。

セシルさんは、結婚と離婚を繰り返していて、確か家族はいなかったはずだ。でもいたのである。孫は1度目の結婚で授かった息子の子どもだった。息子もその妻も謎の死を遂げたらしく、孫の存在は、セシルさんに知らされていなかったという。その孫が10年以上かけて祖母を捜し当て、私の帰国後に再会を果たしていたのだ。

戦時中の駐留ドイツ兵との恋が成就しなかったことが「人生のつまずき」の出発点となり、その後の人生を「不運」「孤独」と嘆いていたセシルさん。孫との出会いはどんなにドラマチックで幸福な出来事であったろう。彼女は孫に、自分を訪ねてきた日本人がいたことを話し、孫がSNSで私を見つけ出してくれたのだ。研究のための取材対象であった彼女の人生の一部に自分が組み入れてもらえたことがうれしかった。

しかし、私に託してくれた「丸刈り」に関する過去について、孫に話しているかは確信がなかった。「広島のことで会いに来た」と伝えているようだったからである。彼女に会った本当の理由を、孫には話してはならないと察した。

（在日外国公館勤務＝東京都）

緑地帯　藤森　晶子

「声」を求めて ④

私が調査してまとめた「丸刈りにされた女たち」は、実際に起きた女性への暴力についての本だ。だが、その中には、性差別にあらがう「フェミニズム」という語も、社会的につくられた性差である「ジェンダー」という語も使う機会がなかった。

それでも私が目指していたのは、「底辺女性史序章」の副題も付いた山崎朋子さんの著書「サンダカン八番娼館（しょうかん）」である。1972年発表のこの作品は、19世紀後半から20世紀前半、日本から東南アジアに渡り、娼館で働いた女性たち「からゆきさん」の歴史的考察を行いつつ、聞き取りを基に彼女たちの個人史を描く。

山崎さんが取材の道程をも描いたこの本にヒントを得て、私は「女たち」を探す過程で、調査に批判的であったり協力できないと断られたりした人の意見も聞き取った。「丸刈り」を目撃したとか「女たち」を知っているという、被害者本人以外による証言も重要に思えてきた。

当事者とは立場の異なる人による証言が、折り重なって社会の記憶になる―。それこそが、「丸刈りにされた女たち」がフランスで国家の「裏切り者」とみなされ、暴力の被害者としては記憶されず、「丸刈り」という暴力の不当性が共有されなかった一つの要因ではないかと考えたからだ。

山崎さんの著書が心打つのは、証言者と筆者の心の交感に接することができるからではないかと思う。歴史の証言者との心の交流は、山崎さんに一番近づきたかったところであり、一番自信がないところでもある。

（在日外国公館勤務＝東京都）

緑地帯　藤森　晶子

「声」を求めて ⑤

フランス留学前の壮行会に、友人が配偶者を連れてきた。50代のテレビ番組プロデューサーで、私の研究テーマに関心を持ってくれており、先行研究を踏まえた「丸刈りにされた女たち」についての修士論文を渡した。

留学先のストラスブールに落ち着いた頃、その夫婦が来訪した。私は喜んで家に招いたり、街を案内したりした。数週間後、夫の方から連絡が来た。「丸刈りにされた女たち」をテーマに番組を制作中なので協力してくれないか、アルバイト代は支払うからという。夫婦で来たのも取材のついでだったようだ。

すでにフランスやドイツのしかるべき機関に連絡を取り、取材が進んでいる様子がうかがえた。だが「丸刈りにされた女たち」はまだ見つけられていなかったのだ。

当時、私自身も道半ばにいた。思うように「女たち」の話を聞けずに焦り、そもそも無謀な計画だったのではないかとネガティブになっている時期だった。

結局、協力しなかった。テーマを横取りされる不信感がなかったとはいえないが、根本的な理由ではない。マスメディアの取材班と行動を共にすることで、「丸刈り」の「被害者」として声を聞きたいという私個人の思いが、おばあさんたちに正確に伝わらないのではと危惧したからである。

留学を終えて1カ月後、日本で放映された番組を見た。ドイツ兵とフランス人女性の間に生まれた子どもを取り上げた興味深い番組ではあったが、「丸刈りにされた女たち」への取材は含まれておらず、複雑な思いだった。

（在日外国公館勤務＝東京都）

緑地帯　藤森　晶子

「声」を求めて ⑥

フランス解放時の「対独協力者」に対する暴力を伴う粛清の様子を捉えた写真や映像は、多く残されている。こうした記録が各地の史料館にきちんと保存され、私のような外国人が訪問しても、分け隔てなくアクセスさせてもらえることには、毎回感動を覚える。

英ロンドンの帝国戦争博物館で、第2次世界大戦下の連合軍が撮影した写真を閲覧していた時のことである。一つの写真が引っ掛かり、前に進めなくなった。それは、ナチス・ドイツへの抵抗運動レジスタンスのメンバーらしきマッチョなフランスの男たちに連行される、初老の日本人男性の写真であった。

背景はぼやけていても、場所はパリ市街なのが分かる。力の差は歴然としており、日本人男性は「君たちに従うからこれ以上殴らないでくれ」と言っているように見えた。

背広姿からして、軍人ではなさそうだ。大使館員だろうか、商社マンだろうか。当時の日本はナチス・ドイツと手を組んだ枢軸国。複数の日本人が、枢軸国の一員であるとして、フランス解放後に収容所で過ごしたことをその後知った。

その男性が日本人だというだけで、私はその日見たどんな残虐な「丸刈りにされた女たち」の写真よりも、大きなインパクトを受けた。まるで写真の中に自分の祖父を見つけてしまったかのように。

この男性はその後どうなったのだろうか。この人だけでなく、当時パリにいた日本人は、おびえて過ごしていたのだろう。いつか、調べたいと思っている。

（在日外国公館勤務＝東京都）

緑地帯　藤森　晶子

「声」を求めて ⑦

きっかけは、広島の実家で母が読んだ新聞記事だった。市内の高校生約40人が2005年5月、私が留学していたフランス・ストラスブールである高校生版の欧州議会「ユーロスコラ」に招待され、平和の大切さを訴える発表の準備を進めているという。

「せっかく同じ町にいるのだから、手伝いでもしてみんさい」と母に促された。同郷の高校生たちの企画は人ごとには思えず、ボランティアを申し出た。

5月になり、広島から高校生たちがやって来た。私は他の日本人留学生にもボランティアを募り、当日を迎えた。高校生たちは、原爆被害を描いた紙芝居を上演した。ただ、台本は現地の言葉ではなく英語であり、紙芝居は小さすぎた。廊下まで観客がはみ出すほどの盛況で開始したが、途中で出て行く人が目立ち始めた。

状況を打開したのは、在ストラスブール総領事館の領事だった。生徒たちの英語を逐次、フランス語に訳し始めたのだ。会場は活気を取り戻し、ほっとした。高校生もなかなか立派にやり遂げた。

しかし、広島出身でないボランティアの日本人留学生たちは、紙芝居の内容にしらけた様子だった。原爆による急性症状や後障害、平和を祈る折り鶴の話などは、彼らの心にはまったく響かなかったようだ。

協力してくれた仲間に感謝しつつ、失望した。被爆地出身の若い世代が使命感を持って原爆による悲惨な体験を伝えるのは「独り善がり」なのだろうか。どうすれば伝えていけるのだろうか。大きな課題を突き付けられた。

（在日外国公館勤務＝東京都）

緑地帯　藤森　晶子

「声」を求めて ⑧

ナチス・ドイツから解放されたフランスで「丸刈り」にされた女たち。彼女たちが私の祖母と同世代である事実は、私が研究を始めるきっかけの一つであり、調査を続ける動機にもなっていた。にもかかわらず、私は祖母に被爆体験を尋ねたことが一度もなかった。つらい過去を思い出すことに伴う苦痛はいかほどのものだろうか。そのせいで取り乱すかもしれない―と心配し、避けていた。

だが、フランスで「丸刈り」に関する証言者をなかなか見つけられず、留学した意味を見失いそうになっていたある日、思い切って広島の祖母に電話をかけてみた。

すべて要らぬ心配だった。爆心地近くまで妹を捜しに行ったこと、被爆米兵の死体に石を投げている集団を見たこと、あっという間に運行を再開した路面電車に驚いたこと…。フランス滞在中、一度限りの機会だったが、古い記憶をたぐり寄せながら1時間以上話してくれた。

フランスでは、私は「よそ者」だからこそ、何十年も前に髪を刈られるという暴力を受けたおばあさんたちに会いたいと平気で思い、そのための計画を実行に移せたのだろう。もっと早く生まれていればもっと多くの証言が聞けたかも、と研究が進まないのを時代のせいにすることもあったが、今ここに生きる私だからこそ、聞けたことがあるのかもしれない。

私が書き留めることができた「女たち」の人生は多くない。だが、「声」を伝える一歩になったと信じ、出会ったすべての人に感謝したい。

（在日外国公館勤務＝東京都）

＝おわり